

## 【地域観光情報】

## 西海市の生活の芸術者たち

Artists in Saikai City Who Devise Their Ways of Living

原 哲弘\*

Tetsuhiro HARA

## 要旨

2018年（平成30年11月21日（水）、11月22日（木））に長崎県が、グリーン・ツーリズムの全国大会開催県となり、県内8か所（西海分科会、外海分科会、南島原分科会、対馬分科会、五島分科会、壱岐分科会、小値賀分科会、県央分科会）においてグリーン・ツーリズム分科会（図1）が開催された。その一つが西海市分科会である。その分科会で講演した内容は、西海市のグリーン・ツーリズムに取り組む人々を時系列に述べ、今後の在り方を模索する内容となっている。

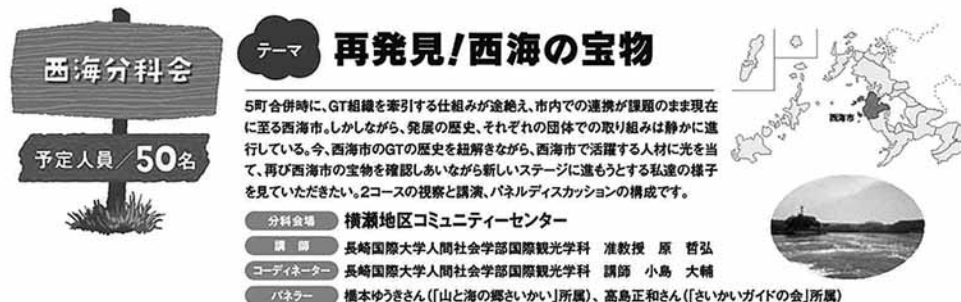
キーワード：グリーン・ツーリズム、顔と顔が分かる関係

## I はじめに

グリーン・ツーリズムとは、「緑豊かな農山・漁村地域において、その自然、文化、人々との交流を楽しむ滞在型の余暇活動」という意味がある。地域行政では、都市と農村が交流し地域振興をもたらす「第6次産業」と言われる。最初の発端は大分県元知事、平松守彦氏が1979（昭和54）年、一村一品運動を提唱した。その時は農業生産と販売に主眼が置かれており、今では当た

り前になった県知事自ら販売を行うトップセールスを行っている。

また農業景観をルーラルランドスケープという言葉で紹介したのも大分県が最初であった。それは日本で最も初期のグリーン・ツーリズムの萌芽と言えるであろう。そして現代では農業体験は観光であり、観光は少子高齢化と後継者不足の時代において課題解決の切り札とみなされている。また西海市の生活の芸術者たちという講演タイトルの「生活の芸術者たち」の定義であ



**西海分科会**  
予定人員 **50名**

**テーマ 再発見!西海の宝物**

5町合併時に、GT組織を牽引する仕組みが途絶え、市内での連携が課題のまま現在に至る西海市。しかしながら、発展の歴史、それぞれの団体での取り組みは静かに進行している。今、西海市のGTの歴史を紐解きながら、西海市で活躍する人材に光を当て、再び西海市の宝物を確認しあいながら新しいステージに進もうとする私達の様子を見ていただきたい。2コースの視察と講演、パネルディスカッションの構成です。

分科会場 **横瀬地区コミュニティセンター**

講師 **長崎国際大学人間社会学部国際観光学科 准教授 原 哲弘**

コーディネーター **長崎国際大学人間社会学部国際観光学科 講師 小島 大輔**

パネラー **橋本ゆうきさん（「山と海の郷さいかい」所属）、高島正和さん（「さいかいガイドの会」所属）**

図1 ツーリズム西海市分科会

資料：グリーン・ツーリズム全国大会in長崎県のパンフレット一部を引用

\*長崎国際大学人間社会学部国際観光学科

るが、「生活の知恵を先人たちから受け継ぎ、あるいは先人たちの知恵を学び、できるだけ日常生活を他に依存しない暮らしをしている人々」の意味である。言い換えると西海市では、自分で何でもしなければならない状況にあり、生活の芸術者たちにならざるを得ない地域である。西海市で暮らすためには、全員が職人たる技術と創造する心構えを持ち、自らも技術を持って暮らさなければならないのである。それを支えるのが地域コミュニティということになる。今回は、職種に限らず技術と創造する心構えを持って生きる西海市の人々、つまり生活の芸術者たちに焦点を当てることにした。

## II 生活の芸術者たち

### 1. 江戸時代の海上生活者たち

江戸時代に、西海市では多くの海上生活者たちがいた。拠点、西海市大瀬戸町にあり向島地区である。現在では向島地区は、西彼杵半島の間にあった瀬戸が埋め立てられ、陸続きとなっている。瀬戸家船と呼ばれる人々は漁を生業としており海上での暮らしをしていた。家船というのは、家族と子ども船を住居に漂泊移動しながら漁をする集団である。当時の船の図面では、船の中央部分に生活エリアがあり、水、食料、タンス、更に神棚と仏壇が置かれていた(図2)。また船首部分が生業の漁をする部分となり鉾を使った漁をしていたのが伺える。

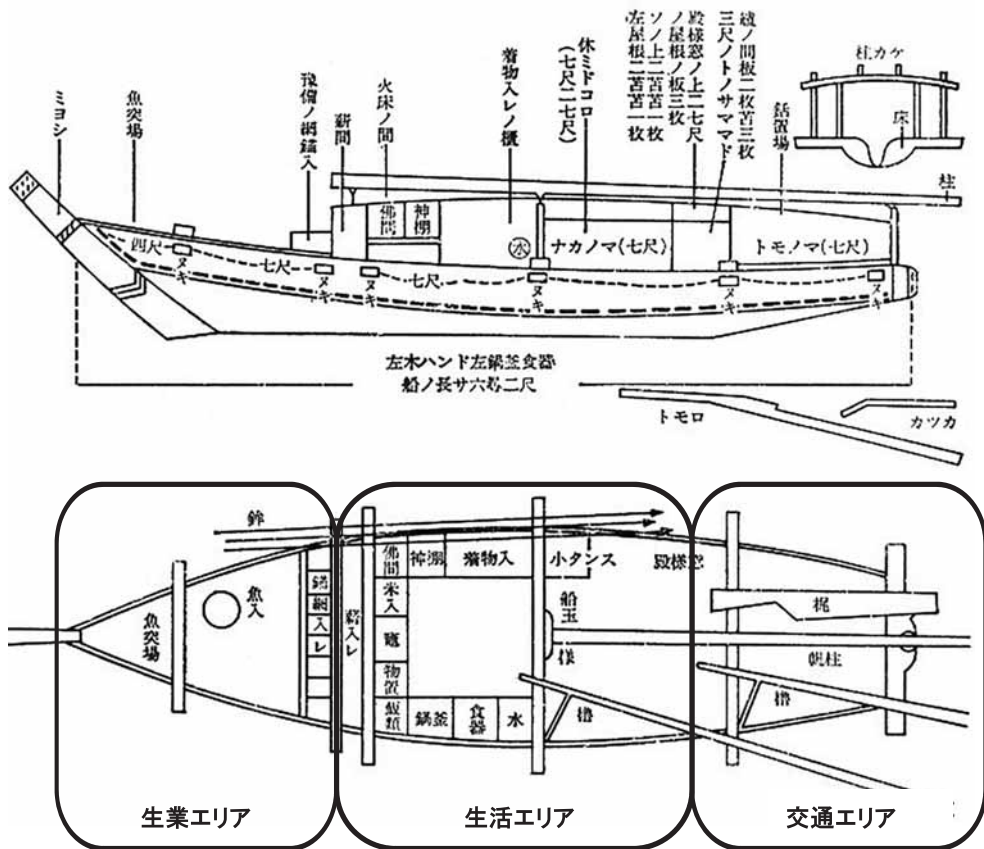


図2 家船の空間構造

資料：木島甚久「日本漁業史論考」『日本民俗文化資料3』219頁の家船断面及平面図に筆者が加筆

つまり漁はホコ突きと潜りである。そして船尾が船の動力部分となる。江戸時代、瀬戸家船は大村藩領内を一艘あたり平均5人収容で、船団を組みながら漁を行っていたのである。まさに生活の芸術者たちは、職住一体となって暮らし、漁の道具である銚を工夫して作り上げることができる人達である。さらに移動は船を手で漕ぎ、あるいは季節の風を読み、帆を挙げて移動するのである。特に暮らしの中にも神棚と仏壇があり神仏習合の暮らしを行っていることが伺える。

## 2. 明治・大正時代の西海の人々

ここでは長崎国際大学元教授である安部芳樹著『懐かしい日々』の一部を紹介したい。安部先生は西海市を長年調査し、多くの著書を残している。その中でも『懐かしい日々』は市民の高齢者にインタビューを行い、大正時代の小学生たちの暮らしぶりが生き生きと表現されている。そこで安部(2014)により、お祭り、主食、芝居・映画について、その暮らしぶりを検討する。

### (1) お祭り

#### ① 西海町のお祭り

横瀬神社のお祭りには、お菓子・おこし・お面・西海町の人々が作ったケーランなどの出店が多く並び、小遣いを1銭、あるいは2銭もらい買い物を楽しんでいました。またお祭りのときは、先生が生徒を全員引率して行き、お賽銭を挙げて参拝しました。

#### ② 西彼町のおくんち

おくんちは、金毘羅様に参りました。家庭で作った御馳走をみんなで食べ、金魚すくい、綿菓子などの出店が並び、小遣い銭を10銭から20銭もらい欲しいものを買っていました。子供相撲も行われ賑わっていました。

### (2) 主食

#### ① 自家製野菜と自家製味噌

麦と芋が主食で自分の家で栽培した野菜・自家製の味噌・醤油・漬物・つけ大根・わかめなどがおかずで、カボチャにご飯を入れて食べるのやカンコロも美味しく食べていました。

#### ② カンコロ餅とイワシ

食べ物は麦とからいも(芋)、カンコロは1年中あり、えがま(保存用の釜)にとっていました。カンコロ飯も毎日焚き、ポーブラズシー(カボチャ飯)はカボチャが保存してある春までは、作って食べていました。おかずのイワシは、1年中ありました。

### (3) 大正時代の芝居・映画

#### ① 崎戸町

映画は、炭鉱に映画館があり、行きました。芝居は、春に乙姫神社の下に舞台を作り郷民全員、夕方から御馳走をもって見物に行きました。「ゴザもってほよ行っとけ」と親から言われ席取りは子供の仕事でした。

#### ② 大島町

映画は、小学校時代、見に行ったことはありませんでした。芝居は、海岸にやぐらを作り、昼から夕方にかけてあり、席は子供が取るのが役割でしたが、子供たちは楽しみに見に行きました。

このインタビューから見えてくることは、西海市崎戸町は鯨組から炭鉱町としての発展があり、比較的裕福な暮らしをしていたことが解る。しかし、それ以外のところでは、現金収入に乏しく暮らしに必要なものは自ら作り出す必要があったようである。食生活では、米を食べることは正月やお盆など

限られ、普段は、カンコロ餅を食べていたことが語られている。現在、カンコロ餅は西海市の特産品となり地域の特徴となっている。

### 3. 昭和・平成時代の西海の人々

1997（平成9）年山下純一郎（旧西海町長）によるドイツ視察によって自治体のGTが始まる。長期休暇制度があるヨーロッパではグリーン・ツーリズムは定着している。しかし長期休暇が取れない日本では本来の滞在型体験というより観光拠点巡りのような一過性の体験となっているのが実情である。その中でも昭和・平成時代に西海市で頑張っている生活の芸術者たちを具体的に紹介する<sup>1)</sup>。

(1) 第1期 グリーン・ツーリズムの萌芽  
西海市西海町では1997（平成9）年、木場地区（直売所「よかところ」エリア）を拠点とした日本でも早い時期の取り組みであるグリーン・ツーリズム構想が始まる。

#### ① 増山文明夫婦（元祖 GT 職人）

安心院での民泊体験からグリーン・ツーリズムに目覚め、「のら体験工房」を立ち上げ、続いて2009（平成21）年「さいかい元気村協議会」を組織し、「さいかい元気村」を開村した。毎年秋の収穫祭や春の「ひょっこり元気村」、さらに子供たち向けのカブトムシ体験など多くの取り組みを行っている。その一連の取り組みの結果、2018年ながさき農林業大賞（長崎県知事賞）を受賞した。

#### ② 谷川美廣・久美子夫婦（カフェ&菓子工房ひこばえ）

大分県安心院と同時期にGTを始めた。若いころ交通事故にあい、大けが

の経験をした。九死に一生を得て人生の再生をかけてペンション蘂（ひこばえ）を開業する。「パンはお菓子とは違って“お腹を満たす食べ物”，甘い菓子パンは作りたくないんです。食事として毎日安心して食べてもらえるように、シンプルな素材で手作りしています」

#### ③ 川崎公子（アイスクリームショップ木馬）

旬の野菜や果物を使った焼き菓子、ジャム、マーマレードを製造販売。「市民一人一人が、誇りと、自分の能力と価値を信じてほしいと思います。そして経験と知識を、次世代に伝えてほしい。ふるさとを作る主役になってほしいと期待します。」

### (2) 第2期 みかんだーム完成（全町公園化構想）

2002（平成14）年木場地区に「みかんだーム」の完成を迎え、グリーン・ツーリズムステーション（GTS）が稼働する（写真1）。当時は、西海市観光協会の拠点として稼働した。

#### ① 高島正和（西海市の顔となりし人）

北海道釧路出身で、Iターンにより西海市に定住する。西海市観光協会、観光ガイドを経て、現在、音浴博物館に勤務する。「生活そのものを観光とする町であり、里山、里海の体験ができ、自給できる町に魅力を感じる」

#### ② 森田敦子（フェアトレードの達人）

佐世保市から西海市に移住して、フェアトレードの経験から西海市の魅力について元気村を活用して「ひょっこり元気村」を長年主催する。女性の視点で、イベント企画や地域活動を

行っている達人である。

- ③ 巢木俊秋夫婦（かんころ餅の達人）  
かんころ餅は、保存食として、昔から西海市で取り組まれた食材であり、ソウルフードと言っても過言ではない。「昔の人のマメさ・働き者の特徴が良く表れた、さらに手間ひまをかけた伝統食品だと感じました。」
- ④ 上野 泰（デザインの達人）  
東京にてファッションデザイン会社の役員を経て故郷にUターン。その後、西海市観光協会会長を経て、現在は、七ツ釜鍾乳洞の旧西海楽園の地を活用し、春には「菜の花祭り」、秋には「コスモス祭り」を開催して、精力的に西海市を発信し続けている。
- ⑤ 山滝正久（郷土愛の達人）  
行政の職人から、次に海の駅・船番所（バイキング料理）の運営に取り組み、佐世保市大宮市場やアーケード街において西海市の特産品直売所を運営しながら、保存食を中心として北海道と西海市との北と南の交流を試みている。

- ⑥ 太田隆太（観光ガイドの達人）

西海市とポルトガルとの歴史は古く南蛮船の貿易の時期にまで遡る。思案橋、丸山の地名が横瀬浦に開設され、その後、その地名は長崎市に移ることになる。「歴史にもしもがあれば・・・・・・・・」横瀬浦に住み歴史の宝をガイドする達人である。

増山家祖父が50年程前（1970年）に開墾した3ha ミカン畑が20年間放置されていた。そこを観光地として2009（平成21）年8月1日着地型・体験農園「さいかい元気村」として開村した（写真2）。

「さいかい元気村」は、さいかい元気村協議会が母体となっている。さいかい元気村協議会は3つの部会からなり、グリーン・ツーリズム部会、特産品開発部会、景観作り部会がある。また自治体の長崎県、西海市農林、西海市水産商工観光、のら体験工房、西海市観光協会が協議会に参加している。

さらに運営システムは、農の塾（循環型の自然農を体験する）は、大豆、そば、堆肥づくり教室などを実施。住の塾（楽しい家づくりを体験する）ではストロベールハウス、コンポストトイレ、自然エネルギー教室などを実施。食の塾（地域の食材を活



写真1 みかんだーム外壁看板パネル  
(2010年2月3日筆者撮影)

かした郷土食やパン作りなどの体験)では郷土料理教室、アースオープン、ジャム、シフォンケーキづくりを実施。最後に遊の塾(里山、川、海などの季節の遊びを楽しむ)ではツリーハウス、コブハウス、手長エビ取りを実施している。古民家再生、農作業体験、企画イベントがある。

### (3) 第3期 里海・里山の職人たち

次に、自治体のグリーン・ツーリズムの推進だけでなく、民間による独自の自主的な動きが出て、西海市の魅力に取りつかれた人々が、独自の考えを持って西海市と係わりを持ち始めた時代である。

#### ① 谷山哲浩(無人島・田島を購入)

ハックルベリー・フィンやトム・ソーヤの冒険物語に魅力を感じ、無人島を購入した。無人島には電気がなく、水道もない。それが「生きる」ことの楽しさを教えてくれる。約30年前まで人々が住んでおり、昔話に出てくるような古い家や田園風景が残っている。

#### ② 原田愛(猫がいる海辺の宿「小さな海から・・・」)

「GTで経済を回す」という理想を、豊かな自然に囲まれた西海市は叶えら

れます。多くの田舎が自然を切り売りしながら経済を回す中で、「故郷を美しく保つことが経済発展につながる」ということは、世界中が理想とする地域づくりの在り方です。それは、意識を持って行動しなければ得られないものです。

#### ③ 橋本ゆうき(西海市地域おこし協力隊)

2011年~2016年「ながさきプレス」に勤め、編集長を経験。2016年フリーランスの編集者・デザイナーとして活動し、山と海の郷さいかいの最初のリーフレット制作。2018年西海市地域おこし協力隊としての活動開始し、西海市農林漁業体験民宿の推進活動を支えている。

#### ④ 宮里賢史(地域商社を設立)

関東で起業家としての実績をもち、Iターンにより株式会社西海クリエイティブカンパニーの立ち上がりに関わり、電力事業を手掛け、教育、IT事業など幅広い活動を行っている。「ばりぐっど」のキャッチフレーズで働き方講座、売電事業など地域商社をPRしている。



写真2 さいかい元気村航空写真

資料：Googl Earth より引用(2009年2月5日取得)

### Ⅲ これからの西海市における グリーン・ツーリズム

#### 1. IT 事業によって世界と交流する時代

多国籍対応（韓国、台湾やイギリス）の民泊、ネット環境の充実、サインの多言語化、温泉施設開業、特定難民受入れによる平和維持活動、アートによる日本文化の提供など先人達が海を通して世界と交流していた時代から、IT 事業によって世界と交流する時代になっている。いわゆるグローバル化貿易とインバウンド観光である。

長崎県は、本土最西端に位置している。言い換えると国境に接する県と言える。IT 事業により海外貿易を視野に入れた戦略も重要な要素である。もし日本版 DMO が西海市にできるのであれば、海外戦略を持って IT インフラ整備を早急に充実する必要がある。そしてマーケティングにより国別対応を行い自然景観や農産物特産、そし

てイベントなどの魅力を発信し、販売、交流を推進することが重要である。

#### 2. 海から見る西海の職人たち（メビウス航路）

佐世保湾（ノースループ）と大村湾（サウスループ）を活用した交通体系により、自治体間の時間距離が全く違う関係となる。それらを結ぶルートをメビウス航路と呼んでいる（図3）。この航路から見る長崎は、車社会に慣れた生活とは違った時間距離の生活が可能になる。

次世代の里海・里山生活者たちは、再度、船のルートを見直し先人が培った知恵を再考する必要がある。人間の長年の暮らしの中で、自然との多様な係わりにより自然の循環・再生が保たれ、海・山・森、植物性プランクトン、河川、海藻、小魚、カキ筏、スナメリ、藻塩、肥料、柑橘系果実など里海と里山を捉え、生物多様性が増すような

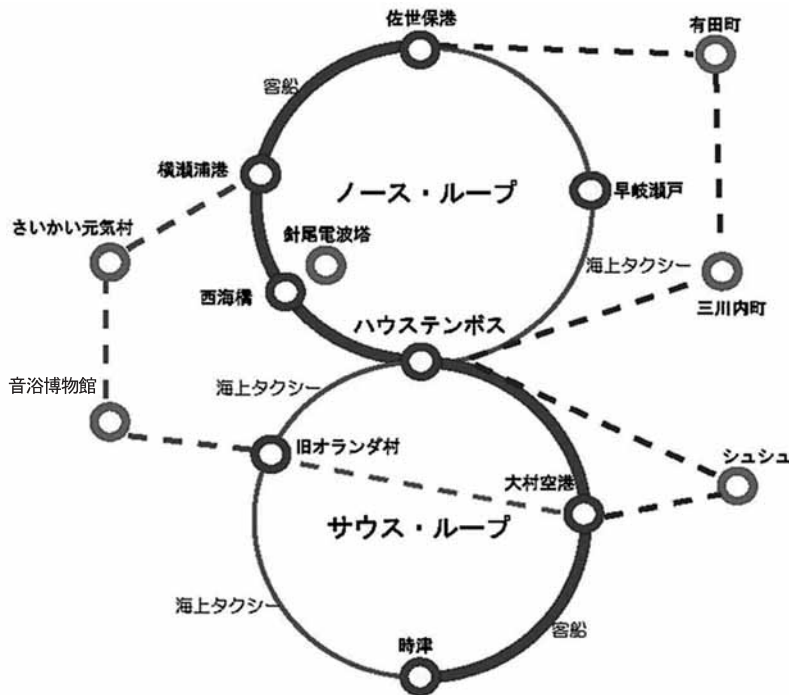


図3 佐世保湾と大村湾を結ぶメビウス航路

資料：原哲弘（2016）：「メビウス航路」『長崎国際大学論叢』第16巻，80頁より引用

自然の循環・再生型の社会を目指すことを期待する。

### 3. 創造上の秩序が混在する街

歴史を次世代につなぐ心が西海市にあるとすれば、ジュリアン生誕地やポルトガル宣教師達との係わりのある横瀬浦天主堂であろう。ポルトガル宣教師との歴史は西海市民の心を捉え、今でも息づいている。神仏習合だけでなくキリシタンを受け入れ神道、仏教、キリスト教が混在する街なのである。宗教を「創造上の秩序」とすれば、互いを理解し受け入れ共存できる社会を西海市は作り上げていくことができる。家船から始まる時代背景にあった暮らしを創造し、いかなる変化にも対応できる西海市の生活の芸術者たちは、これからは観光を切り口として農業、漁業、製造業に取り組む時代へと来ている。それが結果として先人の知恵を継承し農業景観や街並みを保全することになるのである。

## IV おわりに

農業では野菜やコメを自ら作り、味噌や梅酒も自ら作る。漁業では釣り、銚子、潜りによって海の幸が得られる。また建築・土木工事に至っては高低差のある土地を開墾するとき出てくる石を活用して棚田や石垣

を作り、崩れ石積みの綺麗な棚田ができあがる。建物の壁が壊れたら粘土を持ってきて、アマカワ式という技法で耐水性の壁を作ることもできる。そして燃料は炭焼き小屋で炭を作る。昨今では竹炭も特産品として販売されている。魔法の手のように、自然との会話の中から創造される品々に常に感動させられる。

西海市には、掲載できなかった数多くの「生活の芸術者たち」がいて、日々の暮らしを通じ西海市の魅力を発信している。従って是非、西海市の人々と語り「顔と顔が分かる関係」を作って頂きたい。

### 注

- 1) 昭和・平成時代の西海の人々の項において登場する人々は、インタビューをして聞き取り調査を行い、場合によってはメールのやり取りによって本人が書いた文章も含めて紹介している。

### 参考文献

- 安部芳樹 (2014) : 『懐かしい日々』 さかぐち印刷。  
木島甚久 (1992) : 『日本漁業史論考』 谷川健一編『日本民俗文化資料集成3』 三一書房。  
西海町経済課 (2000) : 『西海町グリーン・ツーリズム推進計画書』 西海町。  
原 哲弘 (2016) : 「メビウス航路」『長崎国際大学論叢』 16号, 79-87頁。  
東 靖晋 (2014) : 『西海のコスモロジー』 弦書房。